

地理学の社会的責任

高 阪 宏 行

私が最近よく考えることに、地理学がその社会的責任を果たしているかということがある。地理学の危機が叫ばれて久しいが、地理学が社会に貢献し、その社会的責任を十分に果たしていたならば、そのような問題は多少とも回避できたであろう。地理学者は人類学者に比べ、本の出版数が半分であるという記事をAAGのニュースレターか何かで読んだことがある。それが、アメリカで地理学教室がつぶれた理由の一つであると言っている。出版件数だけで、学界の活動水準を計ることはできないが、わが国の地理学者は、私も含めて社会に学問的責任を果たしているのかという問が常に頭のどこかに残ってしまう。

そこで、わが国の地理学界が取り組むべき課題を私なりに考えてみた。以下に示すような課題に取り組み、社会に対し何がしかのメリットをもたらすような成果をあげてこそ、地理学は社会的責任を果たしたのであり、そうでないならば、無用の学問としてみますます社会から忘れられてしまうであろう。

(1) 環境問題

アメリカとソ連が冷戦構造の中で対立していた時代、地球の最後の時を知らせる時計があった。その時計が12時を指すと、地球の最期が訪れる。米ソ間の対立が高まったときには、1分前ぐらいまで針は進んだ。今日では米ソ間のデタントによって、このような核戦争を告げる時計は必要なくなった。その代わり新たに出現したのは、環境汚染により地球が窒息死する時を刻む時計である。私たちの子供や孫は、常にこの時計に気を配りながら行動しなければならなくなった。ここに、環境問題の深刻さがある。地理学者は、この問題に多くの側面で貢献できるであろう。汚染物質の分布図の作成やその将来の状態の予測、あるいは、汚染物質をできるだけ出さないよう、省エネルギーの都市・地域・国家のあり方などが地理学の絶好の研究対象になろう。

(2) 土地問題

わが国の大都市圏に住むサラリーマンが一生働いてももともな家を買えないということは、わが国のかかえる最大の社会問題である。日本経済が世界のトップに立った今日にあって、これを引き起こす土地問題は、世界の経済発展をおくらせる重大問題と私は考える。どこかで聞いた話だが、東京都1つで、アメリカ合衆国が買えるのだそうである。逆に言うと、東京はそれだけ金食い虫なのである。全世界から日本に流れ込んだ莫大なお金が、土地問題のため国内に吸い取られてしまい、いつまでたっても大半の国民は生活の豊かさを実感できないでいる。世界経済を牽引する日本がこのような状態なので、日本がものを買って、あるいは、日本の援助を受けて発展しようとしている国々は、ますますおくらせてしまう。前述のエネルギーの側面から言うと、東京は、異常なまで大量のエネルギーを浪費する、世界で最も非効率な都市なのである。地理学者は、わが国の大都市のもつ異常な状態を国民に知らせるとともに、遷都や都市計画などで問題を解決するシナリオを提示すべきである。

(3) 教育問題

地理学が教育的側面から実社会に貢献してきたことは、明白な事実である。しかし、小学、中学、大学へと段階的に進む地理教育をみると、地理ほどその内容が深まっていかない教科はないのではないか。先日、ある有名私立中学の地理の入試問題を見る機会があった。大学受験生でも取り上げるような内容なので驚いた。ともかく、学校が上がるにつれて地理の内容が深まっていくような教科書ができないものであろうか。また、人文地理学関係の大学教育でも、スタンダードな教科書が書かれていないのも残念である。

以上、わが国の地理学界が取り組むべき3つの課題について、思うがままに書いた。地理学界は有志を募り、これらの問題に大胆にアタックし、その成果を公表することが今日必要である。